『環境化学（改訂版）』正誤表

（西村雅吉 著，裳華房 刊）

（2012/2/22 現在）

※『環境化学（改訂版）』の第 1 回発行は 1998 年 2 月（奥付の版数表示では「改訂第 8 版」）です

第 11 版（2001 年 3 月発行）にて修正済み　（誤→正）

頁	行・見出番号	誤（修正箇所）	正（修正・加筆方法）
129	表 6･3	フロン 11，フロン 12，フロン 113 の「世界平均濃度 1995 年」の数字にいずれも　$\times 10^{-3}$　を付ける．	

第 10 版（2000 年 4 月発行）にて修正済み　（誤→正）

頁	行・見出番号	誤（修正箇所）	正（修正・加筆方法）
53	6	硫　　酸	硫　　黄
64	下から 7	大きた原因は,	大きな原因は
		採水器および,	採水器，および
83	表 4･6	μg/氷/1kg	μg/氷 1kg　［2 箇所］
111	表 5･7 見出	利用歩況	利用状況
133	1	影響さらに	影響はさらに
139	4	今世紀になって	20 世紀になって
159	84)	change,	change.　［ピリオドをカンマに修正］

第 9 版（1999 年 9 月発行）にて修正済み　（誤→正）

頁	行・見出番号	誤（修正箇所）	正（修正・加筆方法）
iv	2，4，9，11	構義	講義
2	下から 1	ml/m3	ml/m^3
		ことができる．	ことがある．
8	図 1･1	左上の O の右下にある Na を Ne に修正する．	
12	下から 4	応して	応じて
34	表 2･12	「8　酸素」の濃度表示形を O* に修正する．	
36	3～10	［「今は，…［中略］…塩分×0.553541」までを下記に差し替える］ ‘塩分’とは海水 1 kg に溶けているものの総量のことであり，塩分既知の標準海水との電気伝導度比から求め，プロミル（g/kg）の単位であった．しかし，電気伝導度と塩分とを直接結びつけることが厳密には疑問になってきたので，今は濃度単位とは切り離して，定濃度の塩化カリウム溶液との比伝導度から定義される無次元の実用塩分（PSU あるいは PSAL）が使用される．実用塩分は旧塩分とは異なる概念ではあるが，海洋における資料の連続性を考慮して，数値としては旧定義の塩分とほとんど同じとみてもよい．	

41	表 2･16	中ほど「ニッケル」のすぐ上の罫線を削除する.	
50	3	0.00003	0.00002
72	10	［式 (1)］　入る量	入る M の量
	12	［式 (2)］　出る量	出る M の量
78	8	200×10^{12}	2×10^{14}
108	表 5･4 見出	大型原油汚染	大型原油流出汚染
114	13	長月を	長年月を
115	表 5･10	10 トン ^{3}	10^{3} トン　　［2 箇所］
126	図 6･8 見出	二酸化炭素	炭酸ガス
129	3～5	それらの気温上昇…［中略］…否めない.	このように全地球の気温が温暖化傾向にあることは否めず, その原因として炭酸ガスなどの濃度増大を考えざるを得ないのではないか.
	11	寄与の推定は	寄与は
138	表 6･5	（100 万 ha）　の前のスペースを削除し，後を少しあける.	
142	図 6･21 見出	引用文献の番号を 29）　から 28）　に修正する.	
143	表 6･3 見出	面積の比	面積の比の
147	下から 5～4	人口を最近…［中略］…また増やしたという	人口が最近…［中略］…また増えたという
156	25), 26), 28), 29)	総論	総説
159	文献番号	34)	84)
162	左列　「A」	雨の pH　162	雨の pH　160
	左列　「C」	地球規模の物質の流れ	地球規模の物質の動き
163	中列　「S」	森林の減少　38	森林の減少　138